美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

7

2023 July/August
TAKE FREE
NO.78

特集
金峯山を歩く

庄内憧憬
伊東 潤
作家

Cradle 7 美しくなつかしい、日本をのせて。［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2023 July/August
令和5年7月1日発行（偶月奇数月発行）第13巻6号（通巻78号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15［株式会社 出羽庄内地域デザイン］電話0235(64)0888
制作／Cradle編集部　山形県酒田市宮田2-59-3［コマツ・コーポレーション］電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

庄内町　田んぼと鳥海山

鳥海山の麓に　青田風流れる

荘内銀行

藤沢周平の故郷へ

伊東 潤

若い頃から藤沢文学に親しんできた私にとって、周平さんの生まれ故郷に行くことは長年の念願だった。

広い空、どこまでも広がる大地、彼方にそびえる山々の鮮やかな緑。クレードル編集長の小林さんが、車を運転しながら「あの金峯山の麓辺りが、藤沢周平さんの生誕地です」と教えてくれる。

若い頃から藤沢文学に親しんできた私にとって、周平さんの生まれ故郷の鶴岡に行くことは長年の念願だった。しかし多忙な日々を過ごすうちに機会が得られず、2022年5月のこの旅行が、初めての鶴岡訪問になった。

この旅行は、「酒井家庄内入部400年」の東京での記念イベントで私が講演を承った際、「庄内地方には一度も行ったことがないんです」と言ったところ、小林さんが段取りしてくれたことによる。旅行期間中は申し分のない快晴で、鶴岡だけでなく酒田も満喫できた。

今回の旅行では、致道博物館、致道館、藤沢周平記念館、郷土資料館、荘内神社、鶴ヶ岡城跡、菅実秀旧邸、酒井玄蕃旧邸、松ヶ岡開墾場といった鶴岡市の名所旧跡を訪問してから、清川歴史公園、清河八郎記念館、そして酒田の南洲神社、山居倉庫、本間家旧本邸、本間美術館、土門拳記念館などに行くことができ、まさに充実の2日間となった。

どれもが庄内地方を代表する名所旧跡だが、同行した家内のお気に入りは、1日目の昼食を取った「ピノ・コッリーナ松ケ岡」とのこと。こちらは羽黒町・松ヶ岡開墾場の近くにあり、目の前のブドウ園と彼方の月山を眺めながら飲むオリジナルワインが最高だ。旅行の中で最ものんびりした時間が過ごせ、私にとっても思い出深いものになった。

私は、幕末の英傑・清河八郎の故郷旧清川村に行けたのがうれしかった。清河八郎と言えば周平さんの『回天の門』を思い出すが、私が最初に読んだ藤沢作品ということもあり、この作品にはとくに思い入れが深い。そこで綿密に描写されていた八郎の故郷を訪れる機会が持てたのは、何物にも代え難い経験だった。自分にとって縁も所縁もない土地ながら、清川には、故郷に帰ってきたようななつかしさがあった。

2日間の旅行の最後に訪問した土門拳記念館も印象深かった。土門さんの写真が素晴らしいのはもちろんだが、池のほとりに建つ記念館の佇まいが実によいのだ。池を眺められる場所に置かれたソファーに深く腰掛け、ゆったりとした気持ちで、庄内の沃野に思いを馳せた。

庄内地方に再訪の機会があったら、羽黒山、月山、湯殿山といった出羽三山に行ってみたい。神聖な山々の霊気に触れることで、新たな創作意欲をかき立てられるに違いない。

藤沢周平は金峯山の麓、高坂地区で生まれ育った。

いとう・じゅん／1960年神奈川県横浜市生まれ。早稲田大学卒業。外資系企業に勤務後、経営コンサルタントを経て2007年「武田家滅亡」（KADOKAWA）でデビュー。『国を蹴った男』（講談社）で第34回吉川英治文学新人賞、『巨鯨の海』（光文社）で第4回山田風太郎賞と第1回高校生直木賞、『峠越え』（講談社）で第20回中山義秀文学賞を受賞。ほかにも文学賞を多数受賞。最新作に『英雄たちの経営力』（実業之日本社）がある。2023年6月より、BS11の「偉人・敗北からの教訓」でレギュラー・コメンテーターを務める。

特集

金峯山を歩く

初めて登ったのは子どもの時。むきだしの木の根の道をつまずいて歩く私たちを見守るように、木隠れ草陰の石碑が立ち並んでいた、そんな記憶があります。今同じ道を歩いてみると、石碑も杉木も、その山気も、昔ここを訪れた人たちのことを饒舌に語ってくれます。厳しい修行の場、祖霊信仰の地、人々の生活の源流。聖俗併せ持つ私たちの山。この山の麓で育った作家、藤沢周平はこう思いを寄せています。「金峯山は母なる山であり、そのなつかしさはいまもかわらない」明け暮れに眺める金峯山、今日もその山懐に抱かれて。

〈参考資料〉
荘司重司著、金峯神社刊『祈りの金峯山 古碑のみち』（1995）
鶴岡市教育委員会『金峯神社本殿調査報告書』（2001）
鶴岡市教育委員会『名勝 金峯山 保存活用計画』（2018）
致道博物館土曜講座資料「古の金峯山を探る」（2018）
致道博物館『金峯山と修験道―語り継ぐ歴史―』（2021）
金峯山観光協会『金峯山 参道の石碑』『黄金の里 お宝資料』（2021）他

特集 金峯山を歩く

私たちの金峯山

「金峯山に内川の流れ」と旧鶴岡市民歌で歌われ
気軽に登れる山として地元の人たちから親しまれている金峯山。
今、あらためてその自然や歴史、文化的価値を見直し、
地域の「母なる山」として未来につなごうとする活動が進んでいます。

庄内平野の南側に位置する金峯山。標高471mの中腹にある中の宮に車を停め、急峻な登山道を登って山頂近くの一望台に着くと、遠くに鳥海山がそびえる庄内平野の絶景が広がります。この眺望の素晴らしさなどが評価され、金峯山は昭和16年、国の名勝に指定されました。金峯神社の佐々木孝善宮司は「その頃は一望台だけでなく、参道沿いに『台』が呼び名に付く見晴台が11カ所もあり、趣の異なる景色が楽しめたそうです。山からの眺望が評価されて名勝に指定された場所は、全国的にも珍しいと言われています」と話します。

金峯山の開山は671年。古代より修験道が行われ、江戸時代には羽黒修験、鳥海修験と並ぶ修験の山として栄えました。明治時代に入ると神仏分離令による影響などで、修験道は廃絶。しかし参拝者は後を絶たず、戦後は庶民の身近な山として遠足や町内会行事などでにぎわう山となりました。現在も登山や自然散策を楽しむ人々、金峰少年自然の家を拠点に校外学習をする子どもたちの姿が日常的に見られます。

しかしその一方で金峯山は、成長した植林杉によって眺望が遮られたり、自然災害によって倒木が起きたりといった課題を抱えてきました。また、1000年にわたって修験道で栄えた山であるにも関わらず、各堂にあった仏像などを廃仏毀釈から守るために集めた麓の青龍寺が、明治14年に文化財もろとも焼失してしまったこともあり、歴史・文化的価値の見直しや調査がなかなか進められてこなかったという状況もありました。

これらを受け、鶴岡市教育委員会は平成27年に有識者や金峯神社、地元関係者らと委員会を立ち上げ、金峯山の本質的価値を明確にするための調査・検討を実施。同30年に金峯山を未来につないでいくための保存活用計画を策定しました。

「計画書を作るにあたって、金峯をありとあらゆる方向から登って調査しました」と話すのは、保存活用計画策定委員会の委員長を務めた植松芳平さんです。「あらためてすごい山だと思いました。金峯山信仰はかつて中の宮にあった3つの寺を中心に里の22の寺で構成されていたので、金峯を知るには山だけを見ていてはだめだったんです。そして麓からの登拝口はかつて八方八口ありました。これが何を意味するかというと、人々はそれぞれ自分の里から道を作り、登っていたわけです。自分たちの祈りの道がある。そういう山なのです」。

現在まで伝わる登山口は青龍寺口、滝沢口、新山口、藤沢口の4つ。表参道である青龍寺口の麓には金峯山観光協会があり、会を再編した平成28年以降、青龍寺口ルートの刈払いや支障木の伐採といった整備活動を毎年実施しています。他にも、登山道の案内標識などの設置、山と触れ合う市民登山や子ども向けの自然環境学習会、会員向けの金峯講座の企画開催など、その活動は多岐にわたります。副会長の八幡喜代志さんは話します。「金峯山を愛する人がたくさん集まってくださるので、その輪を広げて、みんなで金峯山の自然と歴史をつないでいきたいですね」。

鶴岡市街地方面から眺める金峯山。麓で育った藤沢周平は、荘司重司著『祈りの金峯山古碑のみち』（金峯神社発行）に「金峯山は母なる山」との一文を寄せている。

金峯山の登山道は険しい部分もあるが、中の宮から40分ほどで山頂に到着できるため、幼稚園や保育園の遠足などにも活用されている。

山頂から少し下ったところにある一望台は、その見晴らしの良さから登山客、参拝者の憩いの場になっている。

明治時代の田林禮堂画「庄内領郡中勝地旧蹟図絵」。金峯山山頂と山上からの庄内平野の眺めが鳥瞰的に描かれている。（鶴岡市郷土資料館蔵）

貴重な草花を保護するため、登山道に目印をつける金峯山観光協会の事業に、ボランティアで参加した皆さん。四季を通して金峯の山歩きを楽しんでいる。

6月15日の例大祭は「心天（ところてん）祭」とも呼ばれ、毎年地元・黄金小学校の女子児童が巫女舞を行っている。

金峯山の山開きは2月28日（別名「縁結び祭」）。その前夜、中の宮では例年雪灯篭祭が開催される。他にも金峯神社では一年を通してさまざまな祭礼が行われている。

現在の登山ルートは4つで、谷定・高坂・赤坂・長滝にも古道がある。

特集 金峯山を歩く

青龍寺口コース 一の鳥居〜中の宮［約40分］

古碑が語る庶民の祈りの道

1350年にわたって、信仰され、親しまれてきた金峯山。「金峯山は、麓と中腹と山頂で祈りの形が昔は違う」との植松さんの言葉を胸に、6月の晴れた日、金峯山をこよなく愛する地域の皆さんと歩いてみました。

公益財団法人致道博物館参与の酒井英一さんの専門は考古学。鶴岡市の「名勝金峯山保存活用計画」でも策定委員として調査・研究に携わった。

平成7年に金峯神社が発行した荘司重司著『祈りの金峯山　古碑のみち』は、金峯山の麓で生まれ育った著者が、3年の月日をかけて調査した1052基のうち73基について説明した案内書です。長きにわたって放置され、倒れ、土や沢水に埋もれていた石碑を、著者が1つずつ整備しました。春日山鹿右エ門の供養碑、鶴岡の肴町

深緑の木々に囲まれた一の鳥居周辺は、江戸時代に学頭寺（がくとうじ）として栄えた青龍寺や六所神社などの神社仏閣が集まり、道端には庚申塔（こうしんとう）や地蔵供養塔などの石碑が建ち並んでいます。「金峯山には古い石碑が1052基確認されています。それを1基1基調べてまとめた荘司重司さんのご本によると、少し先の桜谷神社までに全体の66%があるそうです」と酒井さん。車道をしばらく歩き、大きな2本の石柱の間から参道へ入ると、禁酒を祈る「酒がめ碑」など大小さまざまな石碑が目に入ってきます。

金峯山の澄んだ水が流れ落ちる不動滝。滝つぼには不動明王像も。すぐ側にそびえる老杉には藤づるが絡み、圧巻の様相。

青龍寺口は、一の鳥居を起点に、中の宮を拝して山頂の金峯神社本殿に向かう表参道です。かつてはこのルートから山の反対側の藤沢口に下りて、湯田川温泉に寄って帰る人も多かったとか。現在は、昭和41年に整備された車道で中腹の中の宮まで行けますが、今回は古道を訪ね、酒井英一さんの案内で麓の一の鳥居から山頂を目指すことにしました。

出発地点の一の鳥居前にて。前列は案内人の皆さん。右から渡部正志さん、酒井英一さん、菅原敏雄さん。

中の宮までの参道には、寄進によって植林された杉の大木が。その根元に歴史を感じさせる古碑が並ぶ。

金峯山で確認されている石碑の66%が、麓から桜谷神社までに集まっている。「墓」と刻まれた石碑は、墓石ではなく顕彰・供養碑。

かつての仁王門（中の宮の随神門）まで約40分の道のり。

の祈念碑、伊勢講中碑…。祓川の水音と鳥のさえずりに包まれた森を進むたび、さまざまな石碑と出合います。「金峯山が国の名勝に指定された第一の理由は眺望の良さですが、老杉の根元に古碑が建ち並ぶ山内の趣深さも大きかったようです」と酒井さん。

石橋を渡り、桜谷神社の前にある不動滝に寄り道し、さらに進むと「墓」と刻まれた石碑が多く目につくように。「これらはお墓ではありません。門人や教え子が師匠を顕彰し、供養するためのものです。ほとんどの石碑が金峯石で、建立者の約90%が鶴岡の人です。それだけ金峯山が地域の人々にとって祈りの山、信仰の山だったということでしょうね」。金峯神社では毎年7月14日、中の宮ですべての石碑の鎮魂と子孫の繁栄を願って供養祭を行っているとのこと。金峯山は今も昔も、庶民の祈りの山なのです。

杉林の中、古碑を傍らに歩き、社に手を合わせ、時に急な坂道に息を切らしながら歩くこと約40分。中の宮の随神門へたどり着きました。

車道

- 一の鳥居
- 金峯の大ふじ（十王堂）
- 八坂神社（十王堂）
- 六所神社（六所権現堂）
- 青龍寺（宝頭院）
- 粟島神社（阿弥陀堂）

江戸時代に学頭寺として興隆した真言宗の寺院。庄内三十三観音 第33番札所。

昭和44年に金峯神社の末社から独立し、地元集落の氏神様に。昔は六所権現と呼ばれた。

登山道

- 酒がめ碑
- 山神社

金峯神社でお祓いをした覆い紙でかめを封じると禁酒の願いが叶うという石碑。

- 不動滝
- 桜谷神社（滝不動堂）

映画『隠し剣 鬼の爪』の撮影地。

一の坂

- クルマユリ
- 木の根道

不動滝の近くにひっそりと佇む山中で唯一の観音様。

二の坂

- 石切り場跡
- 鳥海山遥拝所
- 巌島神社（弁財天堂）

木の根のみが参道沿いに数本残る不思議な道。

巌島神社の裏手にも弁天台というかつての見晴台がある。

地蔵坂

- 五輪塔群

金峯山三別当の1つ南頭院の墓地。五輪塔が主の墓碑群。

- 随神門（仁王門）
- 社務所（南頭院）

特集 金峯山を歩く

青龍寺口コース 中の宮〜山頂［約40分］

古道をゆく 金峯修験の足跡

杉並木の緑陰から、陽が差し込む中の宮へ。闕伽井の清水をいただいてひと休みしたら、ここから先の山頂までは、変化に富む山道を、金峯修験の歴史を感じて歩きます。

「庄内一円の修験の山は江戸時代の最盛期に鳥海山と羽黒山と湯殿山と金峯山に集約されました」と酒井さん。金峯修験は元禄年間、醍醐三宝院の直末寺として真言宗当山派に属し、独自の修行が行われていたといいます。

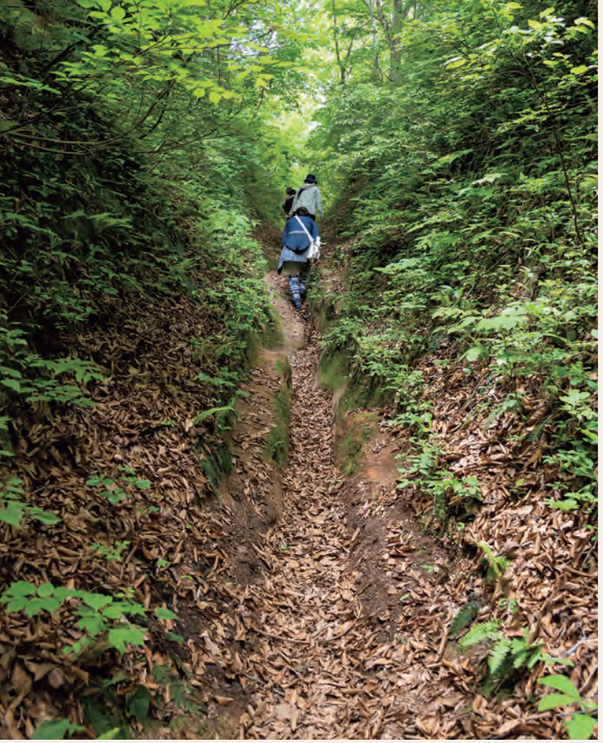
中の宮周辺にはかつて修験道を仕切っていた三別当が置かれ、その一つの南頭院が現在の社務所です。ここで金峯神社宮司の佐々木孝善さんにお会いしました。「毎年2月28日の山開き祭りは旧暦の修験行の峯入りの日にあたり、修験道の流れを汲んだものです」。

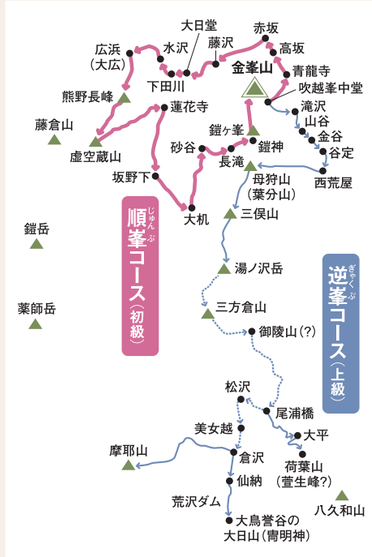
かつて修行者は中の宮から少し登った「吹越」という籠り堂に集まりました。「修行の道場でしたが、修験道が廃絶した後は朽ちて場所も分からなくなっていました。市の保存活用計画の調査でここに光を当て、みんなで懸命に探して建物の礎石を見つけた時はものすごくうれしかったです」。酒井さんがそう話す道場跡地にはいくつかの礎石が。いつかここに建物を再現することが調査メンバーの夢だそう。修行者はここから金峯山の西まわりルート「順峯」を1週間ほどかけて山駆けし、山頂を登拝した後、再び吹越に戻って17日間断食、1カ月ほどで修行を終えました。修行のエリアはかなりの広範囲で、厳しいものだったことが見て取れます。金峯修験の順は、神仏分離令が庄内に公告された明治2年まで続きました。

中の宮を後に、山頂を目指し三の坂へ。急坂に時折息を切ります。八景台から母狩山が見えてまもなく、山頂の本殿に到着しました。「金峯神社の本殿は最上家、酒井家が庇護し、その修復や再建には大檀那として助力しました」。金峯神社には、修行者の名前や時期を刻んだ石碑や板碑の「峯中碑伝」が多く残っています。願文は、当城堅固、天下泰平、国土安穏。鶴ヶ岡城が堅固でありますように、との願いが込められています。

山頂から少し下った一望台に立つと、北に鳥海山、はるかに日本海、飛島、そして見渡す庄内平野。建物が並び、車が走り、471mの頂上でこそ見える人々の暮らし。その眺めは、金峯山が人々に寄り添い、人々がよりどころとしてきた景色そのものです。

下りは一路、林道を歩いて、金峯山の自然の逸話を巡ります。


中の宮から山頂までは急峻な山道を歩く。山頂の神域は昔、女人禁制だった。



江戸時代中期の稿本『金峯萬年艸』から、金峯修験には「順峯」と「逆峯」のルートがあったことが分かっている。

金峯神社宮司の佐々木孝善さん。神仏分離以降から現13代目。社家に生まれ、麓の六所神社も兼務する。

神仏分離前の如意輪観音堂。後に金峯神社と合祀し中の宮となった。

峯中修行の「吹越道場」跡地。この辺りから植林の杉がなくなり、ブナなどの自然林が広がる。

修行者が入峯の証として名を刻んだ峯中碑伝（ぶちゅうひで）。

一望台の眺めを楽しみながら休憩。参加者の1人が作ってくれた山の幸「むかご」ごはんのおむすびが絶品!

修験道のご本尊、金剛蔵王権現を祀っていた山頂の金峯神社本殿。国指定重要文化財。慶長13年、最上義光が既存の御堂を改造し、以来修復を重ねる。禅宗様仏殿形式と身舎（もや）の神社本殿形式を組み合わせた特異な建物。令和3年、100年ぶりに大修理が行われた。

三の坂

- 金峯山博物館（金剛院）※休館中
- 社務所（南頭院）
- 斎館
- 闕伽井の清水
- 水神様
- 至 滝沢
- 中の宮（如意輪観音堂）
- 瘞琴碑
- 空賢院跡
- 八幡神社（行者堂）
- 吹越道場跡
- 須佐之男神社（馬頭観音堂）
- 八景台
- 旧女人禁制の結界
- みこ石
- 一望台
- 至 湯田川
- 至 鎧ヶ峰・母狩山
- 松尾神社・稲荷神社・三宝荒神
- 金峯神社本殿（蔵王権現堂）

銅造如意輪観音坐像
写真提供＝山形県立博物館

平安時代末期の作。廃仏毀釈を免れ、修験道の歴史を伝える。県指定有形文化財。

須佐之男神社
お社が老朽していたが、国の補助で修理事業を終え、今年5月に遷座祭が行われた。

八景台
母狩山、湯殿山、鳥海山の展望地。

みこ石
女人結界の山域を犯した者が石になったとされる。

特集 金峯山を歩く

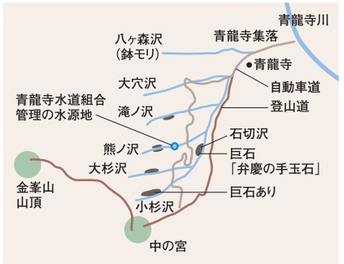
金峯山の石と名水と草花

「金峯山はいい山。厳しさがある。自然環境で言えば、石が硬くて良質で、水がきれい」。地質学を専門とする植松さんからそう聞いて、山頂からの下り道は自然の草花と足元の大地にも目を向けて歩いてみました。

石切り場跡の1カ所、小杉沢に残る巨石。金峯石は鶴ヶ岡城の石垣だけでなく藩主の墓石や、三雪橋や鉄道の橋脚、建物の礎石などにも使われた主要な石材だった。

植松さんが見せてくれた山形県の地質図によれば、庄内地域では金峯山から南側の一帯が古い時代の地質年代を示していました。「月山や鳥海山よりも前の時代から金峯山系はあったんです。地層の方向から見て、高館山と八森山と石鉢山、金峯山と母狩山と摩耶山、羽黒山と月山と湯殿山と、縦に連なる3つの山系があり、一つの大地の物語を作ってきた。金峯を知ることは、庄内平野の最も古い基層を知ること。金峯山系をもとに大地が増えていったと考えると、本当に大切な山です」。

山王日枝神社の手盥盤の銘には元禄12(1699)年とあり、金峯石を材にした紀年銘のある中では最古と見られる。



金峯山の東側山中で確認できている石切り場跡。

金峯山の地層は、中腹までは堆積岩、中腹から山頂にかけては花崗岩で形成されています。「花崗岩は、地球の地殻部の主要な岩石です。硬くて壊れにくいため、石材として利用されてきました」。

金峯山の「金峯石」も、鶴ヶ岡城の城石や山王日枝神社の手盥盤、石碑や墓石、橋脚や土留め石などさまざまに用いられたことが古文書などから分かっています。「山中では石を切り出した跡が多く見つかっています」と植松さん。その跡は江戸時代から現代にまでおよぶとのこと。この石切り場跡の調査を続けている酒井英一さんにも伺いました。「石切り場跡は現在東側山中で5カ所、北側で1カ所、西側で3カ所見つかっています。沢沿いの巨岩を掘り出して、木矢で割って切り出していたんですね。運搬には青龍寺川の舟運を利用して、大山街道から陸に揚げ、多くの人の手で城などに運ばれました」。

石切り場跡のある沢がいくつも走る金峯山内では、どこからともなく水音が聞こえてきます。その中でも、金峯神社社務所前の「閼伽井の清水」は水を汲みに訪れる人が多い名水です。金峯山観光協会の八幡喜代志さんによると「年間12℃前後を保ち、ミネラル成分のバランスも良い超軟水」とのこと。またこの辺りでは、雨が降ると花崗岩に含まれる金雲母が地面をキラキラと流れる様子も見られます。「金峯山の水がきれいなのは、水の通り道である花崗岩の層が不純物を吸着、ろ過するため。良水があるから、麓の黄金地区にはおいしい孟宗が育つんですね」。孟宗はもともと暖地に自生する植物。金峯修験の行者が京都の本山から持ち帰り、精進料理に使われたなどと想像すると、金峯山の自然はまだまだ多くの地史を語ってくれそうです。

金峯神社社務所前の「閼伽井の清水」は「里の名水・やまがた百選」に選定。慈覚大師の閼伽(仏前に供える水)とされ、“煩悩の垢を除く”といわれる。

金峯山の草花

フタリシズカ

タツナミソウ

シャガ

ヤマツツジ

クルマユリ

フジ

ナルコユリ

ニガナ

ウワバミソウ

ギンリョウソウ

マムシグサ

ヨウラクツツジ

シロヨメナ

ミヤマカタバミ

オランダせんべい 煮干し塩味の にぼせん

まだ食べられるのに
捨てられてしまう食品ロスの
問題が叫ばれる昨今
異業種がタッグを組んで
酒田のラーメンのだし取りに
使った煮干しを活用した
アップサイクル商品を開発した

酒田市民のソウルフードであり、全国的にも知られる酒田のラーメン。昨年は4年ぶりに「酒田のラーメンexpo（エキスポ）2022」が開催され、文化庁の「100年フード」未来部門に認定されるなど、今や一食のラーメンを超え、地域活性化の大切なカギとなっている。

そんな酒田のラーメンに昨秋また新たな動きが加わった。ラーメンのだしを取った煮干しで新しい商品を開発するプロジェクトだ。というのも魚介系だしが特長の酒田のラーメンは、多くの店がだしを取った後のまだうま味と栄養が多く残る煮干しを大量に廃棄しなければならない現実と向き合ってきた。その量は「酒田のラーメンを考える会」に加盟する12店舗だけでも1ヵ月500キロ、年間6トン。その長年の課題を知った酒田ラーメンexpo実行委員会は、煮干しのだしがらで新しい酒田の名物を作れないかと、酒田のラーメンを考える会、酒田米菓㈱、㈱さかたの塩とタッグを組み、煮干し塩を使ったせんべいを発案。使用済みの煮干しを乾燥・粉砕し、酒田米菓がそれらを練りこんだせんべいを、さかたの塩が地元で採れる2種類の塩を原料にした煮干し塩を開発。食感、塩加減、風味など試食に試食を重ね、今年5月にオランダせんべい「にぼせん」を発売した。

酒田のラーメンをこよなく愛する人々が集まって、地域の「ゼロウェイスト」モデルとなることを目標に開発されたこの煮干し満載せんべい。困ったことに、食べ始まると止まらなくなる味わいだが、うっかり食べ過ぎても良しとしよう。その一口が、食材ロス削減につながるのだから。

「ゼロウェイスト」とは、ごみゼロを目標に、できるだけ廃棄物を減らそうとする活動。「にぼせん」は酒田米菓直営店、酒田夢の倶楽、庄内観光物産館などで販売中。また酒田米菓では、ラーメン風味のオランダせんべいも同時発売。セブンイレブンで販売中。

酒田米菓株式会社 ☎0234-22-9541
オンラインショップ https://sakatabeika.jp/

（取材・文　長谷川結）

庄内俳句紀行

木漏れ日遊ぶ 新緑の山毛欅の森を歩く

立夏を過ぎると
里山の緑は日に日に色濃くなる。
空が青ければ青いほど
鳥海山や月山の雪渓は白く映える。

季語
新緑（しんりょく）
新樹の葉の艶やかな緑。初夏の若葉の爽やかな緑。

山毛欅の森

山毛欅（ぶな）が根開けとともに芽吹き、新緑がまぶしい季節となった。鳥海山湯ノ台口への道はまだ残雪で通行止めのため、鳥海高原家族旅行村へと向かう。日差しはすでに強かったが、心地よい風が流れていた。旅行村の中にある心字池から、渓流の勢いある水音を聞きながら歩いた。鳥海山の豊かな雪解け水は、私たち生き物すべての暮らしの源となる。雪深い冬があってこその宝である。

雪渓の消えて山容優しくす

―小竹由岐子

沢追分の橋を渡ると、そこからは山毛欅の新緑のトンネル、足元にはふわふわの落ち葉の絨毯。強い日差しは木漏れ日にかわり優しい光が降り注ぐ。落ち葉に包まれながら岩団扇（いわうちわ）が咲いている。猩猩袴（しょうじょうばかま）が囁き合うように寄り添っていた。雪解け間もない春がまだそこにあった。この季節の森歩きは楽しい。長い冬の気配を残しながら、春から初夏への移ろいを感じる。風と木々のざわめき、森に響く大瑠璃の声。水の音の先に赤滝が現れる。

鳳来山からの眺め

新緑や掬へば消ゆる水の色

―阿部佑介

新緑に鮮やかな赤紫色の紫八汐躑躅（むらさきやしおつつじ）が目をひいた。寄り添って見ると、10本のおしべの半分が短く、残りの半分は艶やかな睫毛のように大きくカールしている。さらに登山道沿いに稚児百合、延齢草（えんれいそう）が出迎え、その先に山荷葉（さんかよう）の花が日を浴びて真っ白な花を咲かせていた。雨の日にはその花びらがガラス細工のように透明になる。この花を見かけるとつい雨を待ってしまう。

舞鶴草風待ちかねて揺れはじむ

―河野南畦

横堂に出て、そこから尾根伝いに鳳来山の山頂に向かった。この辺りには、鳥海山の噴火による大きな火山岩が苔むした姿で現れる。爪より小さな舞鶴草が小さな線香花火のような蕾（つぼみ）を膨らませていた。858メートルの鳳来山の頂に立つ。西側は鳥海山の稜線と日本海を、東側には連なる山並みを望んだ。

心字池と赤腹井守

赤腹の水音に揺るる雲一朶

―あべ小萩

下山すると、水芭蕉が咲き残る心字池の周りで糸蜻蛉（とんぼ）が飛んでいた。水面に写る雲が風もないのに揺れる。水中ではたくさんの赤腹井守が泳いでいた。鳥海高原家族旅行村は山並みを見下ろすところにキャンプ場やケビン、ツリーハウスなどがあり、この日もいくつかテントが張られ、子どもたちの声が響いていた。

汗を流しに湯の台温泉へ。吹き渡る薫風が気持ち良い。風、光、水の音、そして生き物の営みを感じることで、心と体が満たされる。次はキャンプをして、天の川を見にここに来よう。

鳥海高原家族旅行村のキャンプ場

◆鳳来山は冬のスノートレッキングも楽しめます。
鳥海高原家族旅行村 酒田市草津湯ノ台149

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）